高村壽一著「響き合うコラム」草場書房 2009 年 4 月 20 日刊を読む

長い道－音楽エッセイ－

１．「一度に一つのことを練習しなさい。練習がうまくいったら、それをこれまでの練習やこれからの練習に結びつけなさい」。

２．これは 19 世紀の最初の四半世紀にパリ音楽院のヴァイオリン科で教えていたピエール・バイヨ(Pierre Baillot　1771 ～ 1842)の『ヴァイオリン奏法』の中のことばである。

３．「一つのこと」を練習せよ、というのは、当面の課題に集中してエネルギーが分散しないように、という教えであろう。山ほど習得せねばならぬことがあっても、これらを並行してやっても散漫になるだけでテクニックは向上しない。

４．これは何もヴァイオリンの練習に限らない。私たちが何かに取り組むとき、目前の最も主要や課題の一つに注力することが肝要だ。その方が結局、効果が大きいのである。ひところ「一点突破・全面展開」という運動論があった。今日の経営学では「選択と集中」が事業展開のキーワードになっている。

５．バイヨ教授は親切にも、奏法についてこうも教えている。「何回かに分けた練習が手際よくできたら、毎日一時間か数時間をその練習を規則的にできるようにし、あらゆる調で勉強なさい。暗譜でやりなさい。」そして、その日のうち何回も繰り返し練習すれば、何週間にもわたって一、二回しかやらないよりは、パッセージや曲を記憶できるようになることを忘れてはいけない、としている。

６．また、教授は「疲れるまで練習することはよくない」と忠告する。疲労は情緒から精気を失わせ、演奏から活力を奪うことになるから、である。この忠告は、演奏芸術ばかりではなく、運動(スポーツ)にも当てはまるし、私たちの日常的な行動についてもいえることである。

７．バイヨ奏法は箇条書き式で広範な内容を持っているが、全体を集約すると「短い時間で克服できることと、長い時間をかけなければ克服できないことを区別して取り組みなさい」ということである。47 年間にわたる教授生活から汲み上げた至言といえよう。

P229 ～ 230

［コメント］

高村壽一先生が御紹介してくれたピエール・バイヨ先生のヴァイオリン奏法の教えは、ありとあらゆる勉強にあてはまる。ものごとを学ぶ(身につける)ときの極意といえる。「学び方を学ぶ」(Learning To Learn)ことを志す人にはとても参考になる。

－ 2009 年 9 月 18 日 林明夫記－